江の島が見えてその先大島が見えて朝日の全貌が見ゆ　藤島秀憲

初日の出をドラマティックに表現するために、カメラを移行するような表現の工夫が見どころ。まだ暗い夜明け前から、水平線に朝日が昇りきるまでの時間が、手前から遠くへ次第にシルエットがくっきりしてくる、そんな読みを期待しているのだ。

人生の夕日とはこんな感じかなわれはまだ母に教はり生きる　高山邦男

下句、いい年齢の男性の短歌として読むときしんと心に沁みる。ただ、「こんな感じかな」の「かな」は文語の詠嘆ではなく、口語の疑問形がそのまま採用されているらしい。そこを意識して「われ」は「俺」など口語的な主語を採用した方がよかったかもしれない。

それぞれの居場所へ帰り家広し小鍋に小豆を炊く小正月　桐谷文子

正月に、独立して家を出た何人かが来ていて、その余韻を感じつつ小正月用の小豆粥を炊いている場面。上句、工夫した表現をさりげなく採用して、うまい。

冬の夜を行ったり来たり自選三首に選ばれたがる春の歌夏の歌　細溝洋子

「心の花」創刊百二十年記念号の自選三首を選歌するときの苦労に取材している。苦労するのは、歌の方で選ばれたがっていろいろ要求してくることがあるからだ、とする点がポイント。古典和歌の歌人たちが自身の「おもて歌」を決定するにいたる苦労話はたくさんある。古人も選には大いに苦労したらしい。

手術中時間は伸びてまた縮む　外はもうすぐ日が暮れるのか　松岡秀明

本人が目の手術を受けている場面に取材した七首だが、受け身であるだけではなく、客観的な視点も同時に取り入れて、独特な連作にしあげている。この作、手術されるという非日常の中での時間感覚が独特。

ビルとビルの間のビルとして立てり　赤坂不動尊威徳寺は　森祐希子

お寺の変化を批評的に詠んだ作。私も、本堂その他がビルになっているお寺を二、三知っている。上句に若干批判的なニュアンスが読めるが、賛否いずれにしても、作品としては、今一歩批評的に踏み込んだ方がよかったと思う。お寺のビル化大賛成でも、構わない。

風いでて小さき山茶花ゆれいたり雪を落して赤き花見す　大岩洋子

過日の東京の雪に取材した作。風が吹いてきて木々につもった雪が振り落とされる。それまで雪にかくれていた花の赤が見えたというのだ。色彩を効果的に使って、ディテイルへのこだわりをうまく一首にまとめた。

石組みに十字作るな四つ角は潰えをまねくと祖父は言ひたり　水本光

古くから日本各地の傾斜地の畑に野面積みの石垣が作られてきた。この歌のほかもう一首「積み石の根方にごろ石たたき込め石をゆるめぬ防御の要」ともあるように、代々このように次の世代へ、石垣造りのノウハウを

短歌の現在

No.445　今月の15首を読む

佐佐木幸綱